

新潟人

教材にルビや翻訳をつける佐々木香織さん(45)

外国人の子学習手助け



手に持つのは、外国人子女でも読めるよう日本語のルビと中国語の翻訳をつけた、小学3～4年生の社会科の副読本「わたしたちの新潟県」。編集作業にはパソコンが欠かせない

ささき・かおり 1966年、千葉県生まれ。東京外語大でモンゴル語を専攻、大学院で社会言語学を学んだ後、2000年に夫の転勤で新潟へ。新潟大などで日本語の非常勤講師を務める。「りてらこや新潟」の名前の由来は「りてらこや(読み書きの能力)」と「寺子屋」から。1男1女の4人家族。

越後地震 2004(平成16)年には、大きな災害が二つ発生しました

教材「わたしたちの新潟県」(県小学校教育研究会)の漢字や数字に一つ一つ、読み方がわかるようにふりがながふってある。「わかって当然と思う文字も、外国から来た子どもたちには難しいんですよ」

09年にボランティア団体「りてらこや新潟」を立ち上げた。

県内の大学の留学生や日本人ボランティアと、小学校の社会科の教科書や副教材にルビをふったり翻訳をつけたり。ホームページでダウンロードできるようにし、これまでに計50部ほどを配った。

だ。00年に新潟市に移っても研究を続けた。

04、07年、オーストラリアで日本語のセミナーや教材をつくる仕事をするため、子ども2人を連れてシドニーに住んだ。「子どもは日本語しかわからないけど、大丈夫かな……。そんな不安も、現地の教師は「ノー・プロBLEM! (大丈夫)」。英語を母国語としない人のための英語教育が整備され、教師も外国人子女を戸惑いなく受け入れていた。「授業も教材も現場任せの日本と、だいぶ違うな」と感じた。

大学4年のとき、日本語教師のアルバイトを始めた。留学生を前に教壇に立つと「自分自身、日本語をよくわかっていないな」と痛感。大学院で日本語の教授法や発音について学んだ。

ふって読ませると、「あ、そういう意味だったのか」

非常勤講師をしていた大学で、留学生と教材にルビをつけ始めた。活動を継続させようと「りてらこや」を設立。10年2、4月には、ふりがなと中国語の翻訳つきの教材が新潟大主催の教科書の歴史展で「未来の教科書」として展示された。

グローバリ化が進み、日本語を母国語としない外国人の子どもが増えていく時代。「物事を考え、理解し、発信する。その能力に、国籍の違いは関係ありません。マイノリティー(少数派)であってもしっかり言語能力が身につくよう、少しでも力になっていきたいです」(高見沢恵理)